

東海大学外国語教育センター 編

『若き日本と世界—支倉使節から榎本移民団まで』

(東海大学出版会、1998年)

森田 裕介

本書は昨年出版された『留学の愉しみ』に続き、東海大学外国語教育センターの教員が中心となって編んだ論文集である。前著が留学先の大学の紹介を目的とする、いわば随筆風の作品を集めていたのに対し、今回はいささか「論文」的な文章を収めている。

目次を開くと、本書は序文を別として9篇の論文・翻訳からなっている。鎖国以前から開国を経て大正年間まで、とくに日本が国際社会の荒海に乗り出していく時期を中心の舞台とし、さまざまな理由から諸外国へと海を渡った日本人、そしてそんな日本とかかわりをもった外国人たちが紹介されている。すべて、何らかのかたちで日本と外国を繋いだ先人たちを主人公とするものである。

各論文の主人公を瞥見しておこう。巻頭を飾るのは、鎖国以前、伊達政宗がスペイン・ローマへ派遣した支倉使節。次に、19世紀初頭、鎖国日本へ通訳としてやってきたドイツ人ラングスドルフ（この論文は旅行記の翻訳と解説）。ペリー来航の同年、プチャーチンとともに長崎を訪れたロシア人作家ゴンチャロフ。開国前夜、二度に渡って来日し日本研究者として活躍したシーボルト。半植民地となっていた上海を視察した高杉晋作。明治前期、朝鮮儒学をもって国体の創出を目指した元田永孚。アメリカに学び日本に労働運動を導入した高野房太郎。オーストリア＝ハンガリー君主国の伯爵と結婚し、ヨーロッパに日本人として生きたクーデンホーフ・光子。そして最後に、榎本武揚の海外植民推進論に始まる日本人メキシコ移民である（この第9論文は現在のメキシコ日系人調査も扱う）。比較的知られている人物もいるし、名前を聞いたことがある程度という人物もいる。読者が関心を寄せる人物があるなら、そこから読み始めるのもよいだろう。

本書を通読しての感想、考えさせられたことなどを簡単に記しておく。

第一に、どの論文もほどよくまとまっており、日本と外国を往き来した人びとの横顔がよく見えてくる文章である。彼らが外国や日本でなにを見、なにを感じ考えたか、紀行文や日記・自伝などを用いて具体的に記述しているためだろう。

第二に、収録論文が時間的・空間的にかかなりの幅を見せる一方で、各論文を繋ぐような人物や土地、事件などを散りばめ、本書全体をゆるやかに関連づける工夫がなされているのが評価できる。たとえば巻末論文の主題であるメキシコは支倉使節の経由地として巻頭論文に登場しているし、シーボルトとその息子たちは複数の論文に顔を出している。こうした工夫によって歴史がさまざまな繋がりとして浮かびあがってくる。また端々でさりげなく触れられる小さな繋がり、たとえばゴンチャロフ文学と二葉亭四迷、あるいは高杉晋作とゴンチャロフの見た上海の重なり、そういった連関も好奇心を刺激する。こうした読み方も意識してか、人名索引・関連年表が付されているのもうれしい（地図がないのが残念）。

第三に、近代「日本人」の誕生という事件に興味をそそられた。注目したいのは教育勅語の起草者・元田永孚を扱う第6論文である。小倉紀藏氏はこの論文で、明治前期思想史を「日本をく擬似儒教社会」として統合しようとする諸思想の錯綜・補完の動きと捉え、その流れの中で元田は朝鮮儒学を駆使して中央集権国家日本の中心に天皇を据えたのだ、と論じている。すなわち元田にとって当時の維新日本はいまだ統合されざる国家だったのである。ひるがえって考えてみれば、第1論文の支倉使節はあくまで伊達藩の人間であって、彼らが現在の我々のような「日本人」意識をもっていたとは思われない。第5論文の高杉晋作に至っても「長州人」としての自意識と列強に対する「日本人」意識が併存する印象である。しかし第8論文、明治7年生れのクーデンホーフ・光子となると、明らかに「日本人」として振舞っている。近代史を、さらには現在の我々の自意識を考える上で興味深い問題であろう。本書はこういった関心も刺激するものとなっている。

以上、感想など記してきたが、近代史に興味のある向き、また欧米など本書の先人たちが足跡を残した土地に興味のある、さらには留学を考えている方は手にとってみていただきたい。また評者としては、人文学系学部に進学したものの何を研究しようか迷っている皆さんにとくにお勧めしたい。読みすすむ中で興味のもてる対象に出会えるかもしれない。初学者でも充分読みこなせるよう配慮されているし、ものごとを繋いでいく学問の快樂もいささかなりと味わえるだろう。ただ他方、各事情に詳しい読者は物足りなさを感じるかもしれない。そういう方は知識にない人物に関する論文のみでも目を通されたいかがだろう。小さな本だが、さまざまな問題関心呼び起こす著作である。

1998.12.1